前日見示葉櫻日記敬誦一過金玉錬成長藏重二子抛評盡矣予輩空疎佛頭着糞宜固辞顧玉寶不須久留急附价封還特憶丙寅丁卯之間先帝英武類　延元上皇滿朝縉紳偶非無如藤房其人者吾藩東西連戰大挫賊燄薩藩抗論京畿持正不回時勢有宜乗者然而曠日彌久是無佗奸邪猜防甚容肘腋之禍難遽除也其間義人志士周旋於　輦下糾合回復之議其苦心可想矣如此日記成其際者豈彫鏤風月之比哉聊作蕪詩以瀆聽

忍看雲霧掩宮牆排擊何時揚日光讀至君家葉

九曜文庫

櫻記。有懷備後第三郎。
元弘之事、末路不善、楠公以下呑恨死矣、今則不然、
曩周旋糾合者、概皆協素謀矣可喜也、有詩、
暫託歌詩敘意衷。
皇威未震憾何窮。豈圖今日回天力。悉在潛行密
畫中。嗚呼逆境易、順境難、先哲有明言爲、鑑昔之元
弘、而戒今之明治、前途可不猛省哉、書以質、
四月十八日
副啓、沿例櫓鼓鼕〻、今日之選、正木埜、名嶋石、筑
紫灘、豐香山之相角逐、蓋壯觀矣、

大兄早枉顧焉、
又啓、踐前日之約、錫造湯灌呈坐下、勿叱却幸甚、
佗待面既、
素狂大兄　　辱交德
研北　　拜手

葉櫻日記

そもそもこのふくさをきまして、ちとしひまく
けもなく都のそらにて雪をみるもちゝなるのや
まゝ人乃そもそれをもむなしくやうきるに
そふのそらにけをのたうちかゝむこゝろ、梅やさくらやと、
そゝろこゝろの物いて、きさらきもなのをもこ
ゝろ〳〵と思ひもちゝを人こなふれといふにてそこけ
もをもろをひきのふとちきて花の月の明ちもの
させとうたりかとりきく五月ちの雨なりふるゆ、
かくてもをもちりをそゝ梅の実をなを旅なれいと

かゝるまで無いるわさなくむとてちきりおきたるふ
さつまの国人伊藤陸金治郎中むらぼ治郎なと
そとなれて五月の二百の日赤間の関にとの流
戸のきをてきはひて乃手ぬいうあそぬほと
乃事とよるふかいつれもれたのやうきめく
物ふなで森なきりれ赤を寅もれよりの
なのらこひきうかきれてきうの日記な
つたるふむのなとこの手乃きさしや

薪おろす四人の花のかゝふ体めるものゝ
鎌倉右大臣の流也

五月二百もれるまを明るきうちあひ
くとて船よりそれいそきて出る体
こゝるくるくるくる久保松太郎福田使平治郎通
きの伊藤伊藤伊藤河内義次郎山平丁助なふ
利きてあるふ
ぬるくゝくるふゝつれを解一時ひつふなしこれ
わのれても赤色湖の草友の漕方を帆れて出てるな
何事もなうるもそを過れ人のそさもけのをあれ
ぬうきそうありてこそ一人きまして出るふなん
三百両ある板なのるまこん新治うあそうつなの

[illegible]

きたこちふかぬ海ばかりまで新治なふ地にて船をえれ
四日ふりし雨ふりぬ日をくらしたるなるこころあるし
につもりそこをいつ
遠をなき風をうちたて船のうらの振つのまろ船のをこのさ
夕日のほのめくこころ松ちる郭公のなをきて
ほとゝぎすこかりのひまを見ていそ山うとゝ鳴まし公を
五月けふをれわるまり時鳥山ゆくしまのせをく
郭をいそ原
海よりまあ蓮のいそ山ゆ山ふ山のの風のゆもしろ支きのれ

大体の見つえ
のそ[illegible]ソや

都のうりの折も嘆
るれらんいそ山の
けこちこちれ
ゆれもるこりえ
[illegible]なり中神無の
さまれうるふ風よ
のこ並本まあ山ふお
りわきれこれり

家人のつりもあこと
移ふいそひまろん
舟ゆく雲ととのひ
つるわう遠のうねも
おのひ出られこまや
いとをこの

海をこちふちまきこのやめをとりまして我ゆ久旅をいふなるうむ
船をるこんより遠風いそをけ
海をほえ風をいのて海原も雲ゆくこちこそれ
れの風のうて西まる加山ゆ山ゆ山ほまて十里の
まゆきまあ久
六日船し久ふふまま西夕の世いとつる
船をふねもを久計こおたるなこの雲れ潮をけ
久つの風もいこのをきまりて月いとゝのりけまて
そのゆを月千小貝をひれ出つまをゆのうら浦ひせん
まま沖の海路の月ふこの帆あて和ゆく旅い船路もな

雲の潮のなこうら
ぬりまこふこえ
おそろしうなん
やとし年くゆ
えをこの
なこうら雨を風つ
ふ月をこのて

こきゆゑほとゝぎす
新流とかなるのん
この

稚りかんる世の頃り
さまゝゝをそなへて
かなうなん

古句詞ゝをめて
爭

なほ長谷の澤に入る畠山何のとゝまの家に宿る
七日ばかり新まゝるこゝろ浪高きうる川口あ
つまる蘆ゝ人の急乱松を折て都の事なと語り
ひてゆる夏の夜ふけ江戸城なる御事つまぬ
ゝとゝまゝひとゝきゝ雑俳はむかりの事なとしるし
八月末にもなる二人とゝもに丸ん
ひて人乃こゝうつに家ふいに
これも近き源より世ひろ久利を巡り雑ハ物も
試みかてらおのゝ者の者ゝ物うつきく
者のもれとなるし源ハのなんうにをゝもとつの恵

九月ふつ新しふ澤の川ふねをるゝ年の
時なりけり

玉川のあのこゝろハかをらぬ
天王山のふもと紙を過すもたゝうら弘を
年なとゆりあく
そもゝこゝもてこゝりゝ舞いまなにまふ矢者のあつこゝろて
澤のこゝろをるゝゝきほゝきあのなゝ紙きて
一部こまふなのて山まきあゝ宝なゆくなゝきあ
ゝなのうち過るほとふ見ふいゝこゝ久珠四ゆと
いゝの家を

永通姫の流し女の
奇なゝねとやき
しくきこえて
めて

ゝふそのかゝのさま
ゆりひやられて興の
なゝゝをゝゝん

今もゝきゝふをれ
ゝゝゝ

十日雨ふる大山橋弁山田ゆきたる拓之人り四人りきて
さるのむしそたくんとしけるとき雨ふるいからし
て大佛のほうまてあるに出わるゆ三田良介河村
十郎永山弥一郎田中徳弁橋本八郎なを出むふ
雨ふるを久しなりて雲ふるれお国寺ゑ御邸
きこいるるふ伏見ものうちまてあふ
かくをうひ〻都ふ山河の海をのうちかうさり久利
十日ふるを絶るさつまの人をあ山の晴をゑ
ほのうち　濁山新緑杜鵑頻叫痛飲浩歎茲憶舊遊
感慨之餘詠國歌一首

人丸の近江の故都をよきられんなまあ
ふかくこそとほ
れふるゝきこえ
なる弁
こふのこかくさまのき
えりをゝくられた
る心あての事ゑ
なほ神のこゝろゆい
あゝらのなるこゝふとふかまほゝなんとゆ神のゝ記をんてこゝろまふかまて

さくらんまをくふさの人ことほのゝふ
和と鄙公のなきかも
れ都〻かなうもを
のうも少えそほれ
なるふこふほえひて
むものるなを持ひ
いそなとかき詠あて
ゆうをの
皇國のかまいとをもゝ聞えをいてふこのを
なをきあうこゝろゆまれをいさものいひえぬこゝろ
芳とふとの理川ふ
ほきあなるを
世しををいのかる
物むきまを一首詞
なくて少えかくなん
をつる
めふゝを取物語を
衣と物を世といと
色りの奇をゆふ
なるくさ

十日雨ふる
こをほをまをひらくをまをゝうのふ記本まいのふかをを舞
十二日ふをゝふ
十三日雨ふる
こをほをまをひらくをまをゝうのふ記本まいのふかをを舞
十四日晴〻〻久しうる
ふつをなふうを人ををのゝ〻きを至をふふくほうをなりせは
十五日ほの大内山ふかひ和の世ゆる語のありうをれる所
のあて〻重て少えられ
うつをふるふなををまをゝ和をみをも井のほうのををゆの〻

[illegible]

十六日 [illegible]

十七日 [illegible]

十八日 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十九日 [illegible]

幾年落魄自多愁。又向天涯送歲華。機去機来帝京下。
獨拓胸襟閑喫茶。丁卯初夏薩越土宇四諸侯朝　闕下
義聲鳴天下。時余趨京師。潛身薩邸。觀天下之形勢。頗有所感。
次土藩田中健介韻

廿日 [illegible]

青草沙邊白骨空。回思往事恨何窮。變遷世態有今日。重入
東山緑樹中。

廿一日 [illegible]

當此時也。雖不當局者。猶且按劍絶叫。況奔走於京畿間。為天下謀大事之人乎。如此首語則平淡。味則真摯。滿胸悲憤。多少感慨。

優游行餘。然亦腔血一灑。

忙中有閒、大事不糊塗者、能有之、

忠厚之氣溢於紙表、菅神豈無感應、

而字平聲可惜、幕府之存至此時幸耳

垂柳毿毿含緑烟。三條橋畔對滿連。
間向三條橋上歩。一堤垂柳緑和烟。不知新月東山出。輭石白砂光
滿川。
城頭秋角夕陽天。三條橋畔滿川水。
凜烈威靈千歳伸。忠魂一片與花新。君寃未霽臣心切。拜
向神明哀訴頻。謁北野神社、悲泣伏訴 君寃、
斷而行之避鬼神。滿朝何事日逡巡。區々海内堪嗤笑。借問京
城更有人。幕府狹幼
天子、以譎智奸謀、愚弄公卿、輕侮諸侯、滿朝只仰其鼻息而止
矣、感憤之餘賦一絶、

肖王新城
如畫

高調
無乃部康節
同感乎

廿四日けふも雨ふる
滿眸新緑曉雲輕。細雨無端又欲晴。寂是東山好風景。幾
層高塔霧中生。雨中望東山、滿目新緑、風色極奇、
廿五日なのはなもさかり
雨拍空牕伴旅愁。雲遮宮殿上林幽。此時獨坐天涯客。杜宇一
聲和夢流。雨夜獨坐有感
廿六日
天の下の事もほきとろ好賊しき人

末句語意未完

都ハとふなつのきこゑ
とゆりを今一きいた
ちまくらの風ゝや

蓋此時魂在天
王山之上矣

サ七日けふもくれて
落魄任為雲水身。風波満地世酸辛。今宵不作別離語。期
在彈丸雨注晨。臨別贈伊壽院金治郎

サ八日たゝ独りあるあかつきの河橋のほとりふ
ねのうへ
休らゝを木のあゝむるのゝ
サれなめふる
白水橋頭繫我思。西望　帝闕與心差。不知英傑幾多恨。空有
灘聲　訴舊時。

六月一日ねのあれそめる月まのうへをとゝてあをこの國よ

ゝ月中きとハいの
なほ月ゝふこのふ
らまはきゝゝん

北斗ハいをのゝうひとら
をてきゝ月なきゝをと
やりふ角ゝのゝん

ゝ月中きとハいの
なほ月ゝふこのふ
らまはきゝゝん

北斗ハいをのゝうひとら
をてきゝ月なきゝをと
やりふ角ゝのゝん

月のうへのあゝをとゝ月まとゝ人をきゝてのち
いゝをゝふゝゝわさゝめぬわのゝをゝらゝをゝのゝをゝゝかりゝを
二月ゝれゝをゝを月のうへゝ
ゝふふれゝをきゝふつけはゝ稲をゝを心のほのれゝゝなりゝわ
三月ゝをゝをゝをゝを
ゝゝ人のゝをゝ月まれかほゝりかゝを寝ゝをとゝをなゝを月ふ
薩人のゝを後ゝりゝ月のゝを今ゝをゝしなゝいひゝをゝめゝを
ゝかゝゝなゝを
四月なゝのゝゝはゝをゝゝゝ
月枕むゝをゝとゝゝを月ゝ月のゆれゝをゝをほゝをれゝ

未半倒置何如、今日回天々功成矣使東湖翁在、其喜果何如哉

事業傾顛未半成、猶明大義誓神明、墨川空作孤囚客、一片精忠與水清、讀回天詩史

微風生處水聲賒、螢火飛来如落花、遥望前峰天又雨、淡雲漏月月光斜、食後與薩士至相國寺見螢火帶樹沿水笑語四起、亦潛伏中之一奇游也、

八月十五日、東山の月を人とともにみるとて

九月十四日、野川の河原の月を見て

又古の縁(ちのき)あるものにたとへて

菅原道真公しるしとなれる

一ひらの月をうつして見てしられ

[illegible]

[illegible]

吾不知俳歌、戯與少年輩探題、隨筆成之

十日

[illegible]

十一日雨

四面笑言如浪喧。滿川燈火與星繁。三條橋上人歸去。始認水聲喧中靜境、知者

[illegible]

蓋斷、情在水月、心存王室、

[illegible]

兼月痕。

十二日なのそはれ

五月雨よりきせるまゝにつゆぬまふれく月の新こほもきぬ

雲もくるしおかるたるけきそはいとゆうの秋

十四日もはよりたり

わきいるるもの雲のうねなて風ふきもぬ夏そうらしき

さもそれのそれゆえ紙もれやなる此思なるう春

十五日なし

歸期還延西鄉来劇談時勢

あつとハはひ定めなのらうとしてありハなのりる理

言必有中

男子何為歎別離。計謀一定莫怠機。出奇處變回天日。共掲
錦旗護帝基。黒田良介有送余詩。次其韻和答

薩人とゝふ河舟もたゝかひてかをるゝ船丸に
のるこそ鐵造りの蒸氣船　船もなん河りゝ歩
廿五日　ねなんとすれ　夜何るゝ河りをゝ
ゝもつなをゝき流志の河ゝもまゝゝちまゝとなるまゝ

ゆんあてめらるるまでひきぬき枝よりあまてねられさりけり
サこ百姓なくさ鎌造りなきを所さらるこのつさ鎌をそ
とて方のおきてにそれさくなきこそ
殺めるるまさもるとも拾ひたゆんまあり枕を鎌
湯屋のこのあねさこそれて腸も熟るるそ死こそこそ
日るれなもとまるこそ三風の河尾ちつきあ中ちまあ
とこ西海隊の出尾平いるなるれとものかるほと枕
とこるもれ重かくてこそ尾なひて腸こ正川
蒲冨の尾山蒲こそ土佐の國人田中徒助を
吾國みまるてよるれ重るいつく人なりるを

奇兵隊のをさめける山縣素性の死こそ見し集め
られ多数集を風雲集とそいふさるを元治の
三年こそと砂といるるをとを川の名を廣島藩
ちこのいのまく数を書してわの長門武國平松宮
きよ中数さこそ世の井こそれ國平松宮
くいこそ さこのこなりそゆきそ武そこの
きこそ武國こ乃を平 雲こなり風あを
方をこるこめ枕 雲とさとくまそ出されこる
このまにな舞 ちこれる拾のれるこを詩て
よをこのるを見こそゆくる雑こきこのこ雑き

あてはるかにまつしなとかなる友すゝ
はのはきこゝろまこと第をとりてこしのなりひらこゝん
そこゝろ自のことをまやあめをたちやはるのはのうんこむ
人こゝとわまを人こゝ

言岳

四月かきこゝそゝれ
とはのうえをゝ
ゝ言ゝ
前句まゝとはり
てきこゝ松つゝほと
かきり調かきなせ
いきこのきこゝ言ゝう
なん時句雲ゝきこゝ
ふむとはりはな

俳諧の城戸の部
今もこゝふゝむこゝわ
ル

二の句をそゝこゝる
内場ゝとはりんの
紙ゝこゝらんの部
題ゝいのゝこゝん
の

月十七日の夕前國門司の関ゝ入ケ
間ゝ

浪きこゝまゝの海の中ふゝ山ゝ中ゝ月ゝこゝ駒てたゝの山
むのふ俳ゝこゝ月ゝ国のゝめゝ名城岩壁錦の霧ゝこゝ
小倉の城ゝ中ゝ藩ゝて弓ゝ山ゝ也ゝこゝ夢秋
ゝなゝ月ゝゝ月
弓ゝ山俳ゝこゝ城ゝの部
秋の中晩の月ゝ
ゝ月ゝ

ゝのふゝ月ゝ山ゝ場ゝ張ゝ月

櫨未多くもみぢせず山の色は
もとのまゝなれども
まだ緑なるものの面のけしきも
なほ秋なり
うゑ人に
うゑ煙たえ、戦ふつゝの音絶て雪まゝちるもまゝちるのみ
菊原の兵庫平城のうち秋の末
むしの音絶て
梅樹うまれて馬ふ跨り徳と老人とをとゝもに
兵庫とゝもに入梅の道遠き故の山陽平の世をゆく
ちり古人の梅山の徳を平にのりてさけるもの
をしき紀事を語りあるべし

四月の末なれども
もとのまゝなる
ちるべし

筆輕意重

ともに和州にいる
ふなん戦ひよた
らんに行るもなん
すなわち和州に
なりぬれば
住べし

兵庫の人々をよ
く識へり

清まきこゝ程山員ひろく
雪侵苦思熟腸回風送清香去復来
瓶間帶笑一枝梅

營中雪夜偶坐有感時敵兵乞和止戰期日屢延議將出兵

いくしの音ふ
何事もなくこゝ
ト和のうる馬関まあり
兵庫の城のうちにて神代のまゝにこゝ
にて
人とゝもに山青樹よりかりてこゝ
なる所この

四の日なりき日かずもくるきの初風をいろ
濃ゆひとしきはめて
多くなん
殘日世をまれりと
ゆき暮ひなん
この
ほのうあぢ人まれ
かく渕ふなりゆく谷
の川柳こそ秋せ
まく渕ひめそ散
ともめてなきうれ
きりの鮎のきふ人
色のさまこそて
ちてゆきかな
ちるそしうこと
出られ多りとやいも
ます

くるをと聲も水こそ霧ふ雨の初のなひくを死初の迎
國の事を語りあひ稲ゆく世の形勢をなるまて
むのまいこもかへてまる涙のなミ〳〵ならぬ世をとなりぬ秋
四季なるそ志の日風のうん
衣更着のころ秋へまのりくる道まて
除渕ふなりゆく川のかを岸の柳ふまむうこと花ものうる
あるこの庭のこのうち
月影を霧ふ踏てうれ霧の籬ふらむ影ほのうれ
道ふ夢の面このうかうる
秋のきて晴時をひかふもちれ国のいをれ夢花さきふりの
東川大人死者まのりくるとを

三日雨ふらんと
ふひていいてこの庭を
ふ河なるとなく
いうなり
清水山いきて
この
泊れとの歌題
向をのれと秋あ
ふ歌ふ侍れいかへ
ひとりいのいきん
まとの門のこきを死
岩清水うきふた
とこなのれこなり
いふ柳流
のとこうこい
ひなて松の風と
なりんのこまきり
多らんこの
ことなる日ふの
も侍くれ
なき人死魂のゆくを告新てとうの人ても時侍てまれ
時と月のまる急都ふ侍来て清れ山ふ世をさんて
志もの人なるもへこの多の清れ山いきてある侍のこうる秋
泊れと門のなのれの清れさへうる世と隔つうるし ありけり
八月十五夜ふ井柳ふ月明村歌詠時山海月東西
風雲なを家居まるのしれ神ふ
何事の心操もなきやうを月をうる書のまし なり幸
ふ 庭ふ
以ふこと死ふ侍なる松風の耳ふ秋をなりみうるの郎
ふこの庭ふ庭ふ世ふ思ひ出ての山里の人となり幸程
も侍くれ
三の日 柳ひし秋となるそいかなるん

とかりなきよ我か
これの我られしきい
としみきれてい読句
のしてか詞とくのもれ
砂白くの之の句まき
こ地まと何らんのき
やまきるへのらん
ーのし

此是酔白堂

さらりとといひえら
れてめてらくなん
排ほゆーのし
心よふろなきえ
なりといひまておひて
名いのえのいひゐも
んのここ見りしもや
あらかふきここえ侍
らん又とそ抑も
ちりし

無隣菴となつけらるとし其秋
名なりなきよ我のれ家も出けれハ月よむしとよ何処宿りして
山々ちおちなものれて砂白く山松ちちら外何なり乃経
清水山前遠市囂疎 松寂竹蕭 有人若問吾茅屋
一径斜通独木橋 自作草廬因賦一絶以題壁上
草廬よりて
きのふ今日呼のしられて秋序の新場の名原ふいれ つきふけれ
丁卯十月六日よしものの北風我ゆ急ちて家ち出けるとき
人ゝ無肉を知らて此我君を思ふこころよふあつなき身なりせハ
十月十日到る閣与諸友談別且飲且吟一時之痛快也

若し三句以下定めな
て定めなき其の袖
そしく事を何らん
うて今一はなすら
のなりらんこのし
それなりての詞むけ
まてさきらあん何ふを
ふ詞い女ふ逢なふ
車の家ふ何ひゐふ
のまての家ふ年をと
ふ年いのまさ女子
逢ふふとならは
詞書たとえての
なり
けふ其つたへのかへれる
ちくとしきよろこひふ

粋な世界に生れたのらお盛な人たといはせたい
十月廿三日朝あらく三田尻の北和を出立総て老人を
とも 一年 覇城まとめ出しける道まて
定なき時の今の定ありてさためなき身は禅よし人をて
十二月の末まてこ居けり 帰りて
帰らとのねて思ひしられなうて、まさ逢見の醜きこともあらん
十二月九日幕府を排斥いたし大御政も古に復り家
君も官位を元にぬかそれ國民乃執ひきさらなり
天地を動かし 理のこころし侍ぬされとかつハ甚
ひとのつたへ聞きぬ百年世の恥物なれハ海山の戦ひ

なへ打出さるゝことの
えだしるとひてなは
よれさまれなきともや
似るうみ思ふなさ
まなめる出であれのこ
ゆくなる人ごころいはの
なりとてあるの
さまさるをちふ夢
契てめでたし

稿しふてと初句を
改めなひて四句見れ
と千年まれいさり
なりとありてい
の軍のことなと志
たまはずにい心の実

のためてなと心いらせに政執る人のもとより申さしける

なま事そうのもののうちゆく人ごころはや とてそに皆も又よ代

雪のいゆくふりなしき

初句おりしきてと誤らまほしきここちにて

緑埋む我住谷の一つとしこうよと通ふ雪れ朝戸出

嵐吹く人の清きみ山のふもとなる庵ふあらゝこゝろ

まのりらく

浴くるか門になるのれをしめ角川たまりたる松の木のうれよりて

よれおのまれこのうてまうるさの友

西月三日来兵衛の人とともれ日の猿にそよりて宇治に

つとつ相はうりしられた

いうられ侍りていて
よきのくゆえあり
くなん
吹くをまる掛けて
あかなきをかきよせく
たらわかしされるて
皆まてと落るを
全なりていつおれ
いわるを明風まし
みひていらぬさ
三句まといいとひ
て結句新そ少ゆる
といふへのまりにある
あかやあれと意練
法言の立ま新のな
ところところうちれ
去るへなさとう少
えてめてたくなん
四句えてこそゆらけ
といえまほうなん

稿しうる齢を惜宜の明小津 手代りとまぐる新まさりなれ

野郡芳芸の錦 雪一匠帖にとりも何へ尺

一族あそれの何らぬのこゝろさへかれこそ なる丁の玉章

まちまりてきれなまて人ぞうへをやいもさけの

落葉のうへくし

こぼれても落る紙に拾る柴葉のこれかられても 秋風それこそり

優にきこえて めで度し

去れもしめ

我庵の瀬のほとりに此ところ身わのなる橘あかる思のこそまた春

庵のあたりにとえられて好も

二月の半 都しまて

あがり山ふまるもしさらふい梅津かつらのちまふ向そた賞

三月の半 お四月開すくら阿弥陀寺の花見にまゐりて

一ぞくらもさほるぬ程よ心ゝて
やゝひの末ゝ都はあらあ山の花えよりして
月みるうゝめしまふふちゝの嵐の山さゝ雪を
むかちりまちり日数を詠し置て人とゝやこゝかゝるゝの風
四月三日都をうて俄よ江戸よりゝ道ゝのゝ
越なかむ函領の深坂西それて関のあなたい月ふなりゆく
王師の先鋒江戸ゝゝ入ゝゝゝ
江戸ゝゝ関所ゝゝ奥羽ゝ戦ひゝる人ゝゝゝ
花ちられ白来ゝゝそれなゝゝ月ふ佐ゝゝ川のゝゝ

越後国妙見峠まて数ヶ戦ひゝゝゝ
江戸ゝゝ出る雲のかゝゝこのふゝて高もゝゝむ越のゝゝゝ
お出ん道の種のゝ蔓くゝゝ動ゝあられのゝゝのゝこして
津川を渡り会津ゝゝ入ゝゝゝ
会津守の風のこの世さゝ不江戸ゝこのゝも多ゝ
憐こ老人の身ゝのれゝ我世ゝ歩ゝゝ
世ゝの我神ゝゝ色てなゝゝのゝかゝゝ子たのこゝくなき
世ゝ国士のゝく討死しゝゝゝゝゝゝゝ
清月あゝて歌ゝゝ有ゝいゝまゝなゝ数ゝふ世ゝゝゝゝれ
なゝゝのゝふゝゝむゝて後ゝのゝふゝれぬゝゝ月のゝ

赤曾関をこえ歩りしく
遥路も赤まうの関をくぐりこの関のつら越して
衣更着路のもしの絶都まで
東海道を行脚の吾妻
人とも百亭梅まるをりて
まを雨の赤のあるの軒をあるひこほるうるもの都
岩山のまをうて
岩をも滴さるの行ら山月まをくゆるれ岩のま
大井川のくるこのるれて赤の雨の滝のまの
きをらの雲より都まで病のるるを

京

余曾有孤剣游遠之志、而談笑呉馬之間者今七年、未能遂宿意、
去歳東北略定、西南亦鎮静、於是断然決策、将入海矣、臨別寄同
志士以供一咲、

欧海を出るまとけるまを去るの旅宿にて

梅の宮の西とりさらてと旅るさひきもの城
ひつしの菅廟児島の勅使右大臣久こられるの時梅のれ

吾将浮海試鵬程、別路杜鵑多少情、萬里江山何日盡、秋風秋月入英

を勅をかうむりて
こちの花と雪とのごとくにて
さくらの花もちりかかる雨にぬれて
風もなき春の花ふるさとにいくもひまとあり花ゆえ
みくりのもとの夕陽暦のもとにあるあるものとも理
梅のつぼみをもてせられる
あらたまるとしの春のものさとに梅をひらんゆゑ世のみな賢の
春のなごりの遺詠表をなを
政をもて新年迎れるにひかれたるかなり
まちかのき新の新年にもて宗宝くるむ雨の邸

雨の紅諸結合を巡て梅を春時して
あるくるる憧奥の石の訪ひるるふ童花梅を客
を詠あて春くれ春 近ところ今湯河をまと
のなを幸梅あうて見覚して少しは六石の訪ひ
こんむれ春 なるこの石のところ中きのて書
なを書ちらし 梅ふるなれ春いと喜と思ひ
前中こと
こころ新通ひやしけん春花さめてきつる男の言葉
明治七とをのこころふ
親しきを踏きを梅を はこうちやと花梅園春春りなれ

船まてゝ[illegible]
ゆふ[illegible]

兵戈倥偬ゝ際乃有題咏如此周到如此精彩
可見功業風流不相妨然自非胸中有閑日月
爭能至此

己卯四月熱海客舍　　金富拜記

人とりふ[illegible]
て[illegible]
つ[illegible]
[illegible]
[illegible]
きの[illegible]
[illegible]
に[illegible]
し[illegible]
[illegible]

悪難を風をふせぎて行り流るをのこう
ちふふ河のあわなる人をもつらねあきつらねあり
かるそこえあるあわえぬところなくこのねもある人とい
ふ契げを）之事河のあるかなるに武る河と
あるこし人の山を船をあ舞こと船屋ふ山方地のふ武事
河のあるとあのならに之事河のあるもいるもの河な
めてあるめて言のうて此をしこたるを係るものを
うる山の費 言岳

西寅の七月十七日の日

立春

宋の石をいくるもまして山の死も地つるまいきて食室
所詠ふるかのねのさらみうこうあたるあるなるる舞
よ城こめてるむ地をうるるる海井死めるてあ死まいきこれ
山居立春

山まわもちる雪を知さるるれ井のかつるあるあを死をあなるら舞

春雨

杉の枝も地なるるうるるふ苔死わるるるるるるまも死あ見これ

まも月

山のふとなるるまは
しらなん
松神もなき出めいき
ろろるるなるあ
めるるふるるなる出
られ雪り

雪を地れしと河て
紙をへ三四五百め
て雪
雪を舞の雪るまて雪
の村百なるとなるり
るあたしわの雪
とれれいこの方紙
を繋のうんの

春柳のみどりをつたへてゆくみなもとうすくもとりそめたる柳の糸

脱

立春の中

浪まもなく風をうたてゆるぶなのうかれてはるハまもあり

暮春雨

きのふけふふるいわのそこのうれて春せぬ雨そ花のうつ音

早春水

雪よりも花の雫ぬきて水とぞ春のうるをのれ

雪

さらぬ川霧のうすぶ風のまを氷ハかりむまのれ

ちほそのこかとれるうとほとふやのてもあもはまつ万やま

雪のうつの詞なきを
ふきこ花柳の
梢の雪のきえたそ
なをひていくの

うるもしきをしなな
なやをくるれあるふ
似るゆり
そこ　そこ
ちるん
ふいまほのそこのうん

春のなをぬも花をつまて雪のあるまを山とはし
雪夕べ春ふきとはうまを夕べを終をなふ　ひとり百花のまほひあり
春の川しまのきとよはうるほ

柳瀬川のほる船路のはををの一節をえてのもむをのれ

花

川ものの人のそ雲のほひまはくはるをの花ををうを
山のなかはしをはををつまてはのとをきをををれ
海ふ雲をををいまをれたをれて雪のら雪をををを柳
花をのも花をををふ山雪の地をををもひのれをを花
且てをなき風ををはをうれ花れ海の雪ををのりして
きのふも雪をををもかうきのうをねををむ雪のうをの郭

柳瀬川かりまを
ふをれをををを
ををやうなり
おをはる詞ををて
れいをの山をのを
より所をのをせあり
いをえをたををを

ひのれゆくれ氣とは
うを一人浸なをんの
地をひきはををく
ををの
ををむの詞はをを
はうをほををなん

花のあめ ふれこぬうち三吉野の うす紙ばかりなる人なり

梅

たぼの風もふなつのく梅のかをりむいそ死山ちく
はるのそも雪も梅のたえぬ世の軒下たまるまちの郭

菜

青柳のうつる死海なきそれいわのなかをゆるるところなりなり
世ちてうくくとまもりり川の汀のわのなゆをうとなりて

雪

移ほうけなくうる死をなよさなのうるい陸まり雪ふて

蕨

はるきあのふるやの蕨のあをの地をぬなるそぬるうて風

蛙

山さて死をの花ふまるあるれてうなるこしけ久なく蛙の声

蛙なる死ろうさくらに死まるりて

夕日の新もあらひて花の色花うるはしきころ
ほひてきこえ
ぬるかこそ戦ひのしもの事を思ひいて、
よはさを紙をあれ
ものとわきまへなよをきこゆるよのもの
終りまきて
のられるとく
をなるなこと
られるの
なみさ
年とやさあや
花ひの
きく紙まちをは

夕日

秋の色なるみ
情花

さく紙まちをは

高く記

山家百合

さく舞ま
沙路卯花

おもたるそ山のそ
新樹

高ちかんまくから
百合

夕立

なこの
ん
本のけまれいと
このよ
百合
さんさ
夕立

夕立のさ過るみのこと

夕立のさ過るみのこと

蛍

夏のきて蛍もたんとはなれたるほたるの乱
こゝをさそふてゆくちいさい宇治川と先年ひて乱ふほたるの乱

郭公

宇治川やうたを舟をもうかべまれなるほとゝぎす
何のつまもとあはうとうたむらさめなるうの羽音の乱
是はやをの杉むらをたんけをつゝとうせ山ほとゝぎす

夏月

なつのきぬ月の浮るを霧こえて風ふくうゝ月もこえてこの乱

死とりと白なしの花
ゆとふ詞ゆたちて
いそくこのきくく
生ほあるとも雨は
結むへきとそれ
ゆる夢多みと結
ろ

早苗

うゑうえし田のうなとたゝわるをはまをうふまる拾うつちなこ

杉下涼

生清水のなのゑ杉の本のえこそ涼をむ(ま)をうなりれ

秋部

立秋

こゝろまゝさそらぬ秋の風の音つゞる秋ぞきゝ分

七夕

織ぬ我門のまゝきに秋ぞとふ秋きゝ分

家つゝ

月

嵐のゝ松ぞ秋ぞ月のまゝわるら舞

出

月前鹿

月

浦月

鹿

秋ぞ

冬部

落葉

けしき聞ゆへく とこのし

落葉の月はさえ 見て抄るる冬枕が しきりに見ゆ也

ことならばちりのこる野風にちらましのねざめの月

山のはのふくままにまかせて月かげのくもりみだれておちるかげの風

霜

むら竹をみれ竹と まくし

むら竹のさ枝にむすぶ霜しもをおきてはてもなくまたあかの風

雪

霰の題まてよまれ あるよさこふまき れ入見るをこゆ それ雪この風と忘 あて二入めてこの むこのし

玉かれし庭の枯葉にすがれて霜も踏さぬ河のへきぬそ雑

都路はまだしらぬ大江山雪のかねたのうこらむ雪の風

明けのころ月かかれむのとえかりにしる梅津の雪和なれ

月松の雪のさかなふ つくも抄るの風に まさも聞るらんの いまも此さまこるこちれ たるひあらぬこち にこ和歌まりて詞さ らぬ業平朝臣の 二首ひあり

宮ちかき竹のはやしにさやけき月の雪のたくほの

吉野川雪のなかのみゆもかすり霞つるを松のこの風のまにまに

早梅

風をいへれ雪さ いそれて聞られ てたくさへあ ら重し

さらぬさへ雪にまがへて軒端ちかき梅の下の世

冬夜

長き夜のしらぬ人までもねざめぬる難波の山の床のさむしろ

社頭冬月

なき男陸のあひ ありつくよくと とのへさ けしきいとその 志けもを残り なく あらるこの風とも わひさいまさりぬ し

さえわたる神のまへに霜おする月の河のせや神かくるならね

千鳥

野の霞のたえまにゆく河淀の月を残してたちどりの風

雁 將

手まさぐりもてあそぶの雁も定てなり新きさえて雲いかりきぬ

雁 雪

雁とりのかすみあとのこゝろかれてふちりてもとゝもむきのとゝちい

父の母ひきゝとりくるとしの雪哉

いのちを鶴のなを面影を神ゝ孫をうゝ雁をしこの雁

なきこのけのりやとほさのうゝ雁そゝも梅ひくまなくうゝとしこの雁

恋部

恋のうゝこのうゝ田うゝ苗うゝ井ゝ

恋部

恋のうゝこのうゝ田うゝ苗うゝ井ゝ

雑部

壬戌の夏なりしうゝ村

いつ契のなりのうゝやこの海と無雲霧の動く田のもなり雪理

上杉通信

うゐねの夢のなごりよ四方山ゐる岩山ゐる岩山ゐる岩山ゐる

四方山

夢なるて捨てる月和年一年のさらさらとうれむの言の葉ふ

迷懐

こころのうらうら捨てなるきつる岩なるこころなるら舞

ゆ魚河りて

山の井乾きよ乾なのれもうあてこそもこそ捨てる乾ならひうれ

幸爾の栄花栄よりのしら財

夕月のこのけのほそ道られ歌ふそやとのしうなりけり

なるこのゆ魚河りけ

をのうらひこのけ

られあり

二立のともよ旅のう

さこふふ立そ今も

ちられそ乾ぬそ

らられ

日のうそ絶ら乾

物ふるなりと河

る絶文あと

馬解あるの河きこよ

あられ河ひとふと

栄幸集ふこゆ

時立河ひそいれ

河ときこゆの

神を乾と人の河

神を乾らきまと

ふきそまれ

立をうんそふ河な

れるなり

清くふ物ふる道まく

乾衣やも神ふるの物のかをのこして ふるこれこれ

芋松うえいならひのもにほうらむにを夢なれあり このな

蔭ひらとふつきとをもくるとて

神ふ乾軒端の乾やいのならんはのかんひらも梅ふる立れ

馬解ふこふ芋ふ松よりから絶ふつきふふ墨ふふもこして

りふまいくふ乾神を乾らん乾まきこそ立れ乾りまあ

壬成の乾ふ都ふありて

立山ふ山のそれのふきれかんのなのゆくかふ乾川ふ

四條わらのもと思ひいでなつのうなん

杉間の月の上旬ひ何日花そ何日それ

繁てのさ方よりとものゝ

いとめでたしとふぶ

思ひそまれたるを

の新しかるを思のあり

一入哀まさりとえを

ゐてもいとあくま

さるの

けしきこそ

なり

ひえ方まゝまこえぬ方ふ冬のと梅うえかれむ大きらの里

けふもまゝ赤まゝそひくまゝ如とかゝの川原平久きこちん

地なし年杉浦杉洞都まそ百万のれを傷そ

一夜宿をこゝのそらうえ行くのきてめる栗田の山寺をきに

父の一周の忌年

もらしそれそらかく平氏一めり色とりてもやくぬる神の風

重成のまその事行ありて

きえかゝるこそ塔の風さきこ坂のさゝ社雪ゝそ

夢

西あのもなふ夢のえてきゝ夢も新端なめくるこのれ

上旬なほうく

成年のゝ都まりるる時あり山ゝて

花とのこそ花のえらむあり山杉の木のかのゝもちそあり字

癸亥のゝ入江る遠とれる都まをる過ゝて

巻このひの年志の小神のゝて都うちゝ小るそゝ浦なゝ

回しうち中山殿の別荘よめれる時

いこのむのの風ありるかしてこそゝ皇氏都のゝ氏

志をゝるかきて楽ふりも坂らあ

回し年の京都よりらんと出ゆとう京長隊

の人ゝをゝゝめけ神ゝきひて行んもそ

三里風の里ゝとまりて遊るなを思ひいそく

年よりとひ事遊

作紙巻のひと

きそひつゝて古

河の上四ゝ絵く

をのかゝん

うゝれるあゝこゝろ

地のれゝ地なし心と

那一舞

此の春なりと
いふべき詞なかい
よくその入り
三首の内此の首よ
くそのひでめでたし
此の御志みきて程
多くなる事なひき
よりぬへきらるれ

よみうき我のし身とてこともいつのしれに寄りかれ
もいかる露のうそを払はれて袖をしほるなり
いとかなりし時宗の時宗にまのりて
きの所持もくするなり秋ふなくとも志ほるなりけり
もきものしかなひとり露すつそともなくし

ゆゑありて

まさし我らの春ふ払はれてもちぬそめてき安くらかぬ
壬戌の冬ふりしき都に上らんとするほとよみ
さわのしきなくいひてとらへられは志ひて
まれとて

なふ払ふべきと
いそしても詞書ふ
みえあひ侍られ

思ふは当てなれ歌
識の心ゆかしたれと
まうらゆ
西行なとぞとひて
武士なにはなれ
くちなんとするまことすかれ
ろとは物あるまくて
くるし

虎なれは人はいまて
よむ歌あはひまこの
詞書られて以て

明る志らぬ露の命ち我わそかの我なのでも命をなふ払ふまひらん
軍立て山口のきよ人神出したる時そこに我
大神宮の廣前まで陸奥への神霊にまうら
でつとりしとき

國

の安危をうらむ我身まと一騎手つくたちそまそ之るかは
いさくの志我失ひたる時
これ仲のよみうきかしの杖とうきれと命まつそられしうらの涙
乙丑の春甘甲の事とも末ぞ文ろるまかりて以
さこの神ひ立たる事の始りたれは
ゆく軍勢のきすてうたそれ虎なれは建てり昔を行かし

ほたひおくあるを
はれいなつかしき
こゆる声のにのな
るものときこゆれ
おりうけさとかく
ほとりの詞いまこのい
のうしやきこゆこ句
あり秋やくはうお
後にかれあひく能
る葉のう辞の
こゝはやくわりな
まいはまなるふた
四五の句とりな
つゝきこねのさわ
らひなとはかれひ
ときいめてこのえの
てことふるはりて
きくうち四五句く
なれもかねほまて
そのれといまこのき

おなしころおりふしことなりしく
かしまし蛙の声にまじふ人てまほひゆくあるまのさすらひ
此年とかうして周防國さるの郡にまかりて
旅するとき
こゝはやまりおうらのかくほとりかりのすみなれからきとの舟
おちゆきとかゝるしらかや夕暮の旅人目なれぬ露のちまつてた
（られあひたりや行平殿のおもひ出られて優にやさし之なむ）
乎蕨菜のさるもの
わきさことゝひそらのあきをさうなつのしくをゆきさわらひ
甲子秋のもしめ谷口村氏なと秋すゑ西帝
より川ふねまてありけるとき

をきし加へて書れ
うるなるらん
よろしくそのひて通
ひの浦わりうるや
うなり前いかく
らそよむへくれ
山をくゝうのもの
なるれしき急うき
なれていれあるのめし
詞書略られて
きことりのれし

ゆくみ年秋さへてさうら川月をも記せてそれしきふね
おなしとき かまひのうらまて
はなきほうこゝ静まりてされしほと月も通ひのうらのゆふなきさ
山水の圖かくもさのまゝ
花やこまてかゝるれきもはかときく山遠くしてみうろのなかれ
ゆゑありて
うまく雲も風もいとそし人のこ比日ときふきの世つるかた
錦りゆく世のうつ秋をなれ文まきてまたとち
の筆なとおもひいて
はうそを飛しなまも記するのうしあしをかよひゆく人の身とそえぬる

三月の末のころ
まことの名とふ
ちひさの山とちなせ
とうたれそうな味
さらにたこてのれ
はのなくなん
武者の人となり
いもとられて安のら
そくをうなる
こと聞きとある

二句のうえをそのり
強句をきりんり
とのうをほうなん

かくもうちうひとら
れてた雅のいちり
みたのふとるとこ
むの

夏の雨うたえうけ一つとのいみをきさらふかひなのりなり
けをそなきまをちきて藤をけのそうあちきそ三四日いな
乙四郎の屋小蒲たる武者のさまふ
うくかきてと以れれい
うのねのつれやをちらさをうそあてやく泊のみそ
同一年のれ年人をよ四の屋所うなりて
むのふ紙のうをそくうそれやくとさをさちる
拙なし三宮山うう長三四郎よ語りてとし
三月ばくくそうんなをいひうを拙て
うんうるれは兎とまいかるのらめおうちきりしことなわれをそ

西寅のとしのとを兎のふ清水れをきをくて
軍三しうるうき
三なをふをうあれなのもふまかくそなるくをるのうの風
うあれ氏和ようをうる暁のく起出て長とも
拙しうて親うちならしてんと和りふをは
うれそうきれのとのなうをとて
うの月をもうを兎てをのうもを山をなうを和ちうあ
同しを和宮閣なる屋仏なるのしうう四郎
拙隠章ふ合氏とそをまをのうく
拙れの和れ男れ陸をなう
ひとれいのなをうんかをう
なるのきをうしう四郎かくはとうまて

なをなきくうん
人の字綱を拙りて
慨の字なのあを
ゆうんうちうしそ
いをめてうを
ちてはをのかれと
かをうをうの頃いのふ
そやきあを)ハ二三
白赤の四の陸をきて
れいとして五月城
を紙うわたれそむ
きそをもむとし
ひとれいのなをうんかをう

何くをむをくれ
めそ陸のちぬ(き
郎れ

竹林寺を題とするまきのうた

我聖人のこころざしをつたへ
ふる井をなほ
繁らせきふるいにしへの
なるらきふるいの
ゆるまきすのうた
その一首も加るな
ゆきかはなしらなん

解脱をこのうたかはふとありけく

ここをもこうつたひゆくこのふの里をたづねて我聖人の
元弘三年の夏敵とも我境きらんとする頃高の
ひとなりける青葉隠の毛をもちけるこ山田郡竹のうち
富浦なと忍ぶる君相の歌をもとひとをれた

なきをのやいにしへをしらぬこころに

ふの城をもこの秋の城戸もこの秋の引のうちつ以をふ名の
荒ふきあちてふるものにたるさむき雨のとをかしらをうて
そをうつをしらう河をめ

我友山縣子朱ノ子とふこの集よなふとの名つ
けくを以ていたをうるふすてゆる以ま年
こんを紅海路繁るたる和歌のわさをし
大皇國をなれきて なほ計雑歌を歌きある
をうるのをうりをいつる人をの横さまなる紙
夢れなと時をつ家打こ曙れて時ふ年ーなる
年以酒書るのをまきて方和こんのをてしき
をちをうを紙すのしら 於ねる鳥鳴ふ

青死せるの日

こ月卷

にわの山桜をこゝにうつしそゝぐたゞ、
そのまゝ植えとりて、やがて旭桜集と名つけて、
ひとゝきたゞへあるきたるをこゝに人をまねくなるわ
さと矣。のしるし　忠義しるす